歌行燈

泉鏡花

青空文庫

一

宮重大根のふとしく立てし宮柱は、ふろふきの熱田の神のみそなわす、七里のわたし浪ゆたかにして、来往の渡船難なく桑名につきたる悦びのあまり……

と口誦むように独言の、膝栗毛五編の上の読初め、霜月十日あまりの初夜。中空は冴切って、星が水垢離取りそうな月明に、踏切の桟橋を渡る影高く、灯ちらちらと目の下に、遠近の樹立の骨ばかりなのを視めながら、桑名の停車場へ下りた旅客がある。

月の影には相応しい、真黒な外套の、痩せた身体にちと広過ぎるを緩く着て、焦茶色の中折帽、真新しいはさて可いが、馴れない天窓に山を立てて、鍔をしっくりと耳へ被さるばかり深く嵌めた、あまつさえ、風に取られまいための留紐を、ぶらりと皺びた頬へ下げた工合が、時世なれば、道中、笠も載せられず、と断念めた風に見える。年配六十二三の、気ばかり若い弥次郎兵衛。

さまで重荷ではないそうで、唐草模様の天鵝絨の革鞄に信玄袋を引搦めて、こいつを片手。片手に蝙蝠傘を支きながら、

「さて……悦びのあまり名物の焼蛤に酒汲みかわして、……と本文にある処さ、旅籠屋へ着の前に、停車場前の茶店か何かで、一本傾けて参ろうかな。（どうだ、喜多八。）と行きたいが、其許は年上で、ちとそりが合わぬ。だがね、家元の弥次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴の喜多八にはぐれて、一人旅のとぼとぼと、棚からぶら下った宿屋を尋ねあぐんで、泣きそうになったとあるです。ところで其許は、道中松並木で出来た道づれの格だ。その道づれと、何んと一口遣ろうではないか、ええ、捻平さん。」

「また、言うわ。」

と苦い顔を渋くした、同伴の老人は、まだ、その上を四つ五つで、やがて七十なるべし。臘虎皮の鍔なし古帽子を、白い眉尖深々と被って、鼠の羅紗の道行着た、股引を太く白足袋の雪駄穿。色褪せた鬱金の風呂敷、真中を紐で結えた包を、西行背負に胸で結んで、これも信玄袋を手に一つ。片手に杖は支いたけれども、足腰はしゃんとした、人柄の可いお爺様。

「その捻平は止しにさっしゃい、人聞きが悪うてならん。道づれは可けれども、道中松並木で出来たと言うで、何とやら、その、私が護摩の灰でもあるように聞えるじゃ。」と杖を一つとんと支くと、後の雁が前になって、改札口を早々と出る。

わざと一足後へ開いて、隠居が意見に急ぐような、連の後姿をじろりと見ながら、

「それ、そこがそれ捻平さね。松並木で出来たと云って、何もごまのはいには限るまい。もっとも若い内は遣ったかも知れんてな。ははは、」

人も無げに笑う手から、引手繰るように切符を取られて、はっと駅夫の顔を見て、きょとんと生真面目。

成程、この小父者が改札口を出た殿で、何をふらふら道草したか、汽車はもう遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のように月下に吐いて、真蒼な野路を光って通る。……

「やがてここを立出で辿り行くほどに、旅人の唄うを聞けば、」

と小父者、出た処で、けろりとしてまた口誦んで、

「捻平さん、可い文句だ、これさ。……

時雨蛤みやげにさんせ
宮のおかめが、……ヤレコリャ、よオしよし。」

「旦那、お供はどうで、」
と停車場前の夜の隈に、四五台朦朧と寂しく並んだ車の中から、車夫が一人、腕組みをして、のっそり出る。
これを聞くと弥次郎兵衛、口を捻じて片頬笑み、
「有難え、図星という処へ出て来たぜ。が、同じ事を、これ、（旦那衆戻り馬乗らんせんか、）となぜ言わぬ。」
「へい、」と言ったが、車夫は変哲もない顔色で、そのまま棒立。

二

小父者は外套の袖をふらふらと、酔ったような風附で、
「遣れよ、さあ、（戻馬乗らんせんか、）と、後生だから一つ気取ってくれ。」
「へい、（戻馬乗らせんか、）と言うでございますかね、戻馬乗らんせんか。」
と早口で車夫は実体。
「ははは、法性寺入道前の関白太政大臣と言ったら腹を立ちやった、法性寺入道前の関白太政大臣様と来ている。」とまたアハハと笑う。
「さあ、もし召して下さい。」
と話は極った筈にして、委細構わず、車夫は取着いて梶棒を差向ける。
小父者、目を据えてわざと見て、
「ヤレコリャ車なんぞ、よオしよし。」
「いや、よしではない。」
とそこに一人つくねんと、添竹に、その枯菊の縋った、霜の翁は、旅のあわれを、月空に知った姿で、
「早く車を雇わっしゃれ。手荷物はあり、勝手知れぬ町の中を、何を当にぶらつこうで。」と口叱言で半ば呟く。
「いや、まず一つ、（よヲしよし、）と切出さんと、本文に合わぬてさ。処へ喜多八が口を出して、（しょうろく四銭で乗るべいか。）馬士が、（そんなら、ようせよせ。）と言いやす、馬がヒインヒインと嘶う。」
「若いもの、その人に構うまい。車を早く。川口の湊屋と言う旅籠屋へ行くのじゃ。」
「ええ、二台でござりますね。」
「何んでも構わぬ、私は急ぐに……」と後向きに掴まって、乗った雪駄を爪立てながら、蹴込みへ入れた革鞄を跨ぎ、首に掛けた風呂敷包みを外ずしもしないで揺っておく。
「一蓮託生、死なば諸共、捻平待ちやれ。」と、くすくす笑って、小父者も車にしゃんと乗る。……
「湊屋だえ、」
「おいよ。」
で、二台、月に提灯の灯黄色に、広場の端へ駈込むと……石高路をがたがたしながら、板塀の小路、土塀の辻、径路を縫うと見えて、寂しい処幾曲り。やがて二階屋が建続き、町幅が糸のよう、月の光を廂で覆うて、両側の暗い軒に、掛行燈が疎に白く、枯柳に星が乱れて、壁の蒼いのが処々。長い通りの突当りには、火の見の階子が、

遠山の霧を破って、半鐘の形活けるがごとし。……火の用心さっさりやしょう、金棒の音に夜更けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓達は宵寝と見える、寂しい新地へ差掛った。

幅の下に流るる道は、細き水銀の川のごとく、柱の黒い家の状、あたかも獺が祭礼をして、白張の地口行燈を掛連ねた、鉄橋を渡るようである。

爺様の乗った前の車が、はたと留った。

あれ聞け……寂寞とした一条廓の、棟瓦にも響き転げる、轍の音も留まるばかり、灘の浪を川に寄せて、千里の果も同じ水に、筑前の沖の月影を、白銀の糸で手繰ったように、星に晃めく唄の声。

博多帯しめ、筑前絞、

田舎の人とは思われぬ、

歩行く姿が、柳町、

と博多節を流している。……つい目の前の軒陰に。……白地の手拭、頬被、すらりと痩ぎすな男の姿の、軒のその、うどんと紅で書いた看板の前に、横顔ながら俯向いて、ただ影法師のようにイむのがあった。

捻平はフト車の上から、頸の風呂敷包のまま振向いて、何か背後へ声を掛けた。……と同時に弥次郎兵衛の車も、ちょうどその唄う声を、町の中で引挟んで、がっきと留まった。が、話の意味は通ぜずに、そのまま捻平のがまた曳出す……後の車も続いて駈け出す。と二台がちょっと摺れ摺れになって、すぐ旧の通り前後に、流るるような月夜の車。

三

お月様がちょいと出て松の影、

アラ、ドッコイショ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたように、霜を切って、唄い棄てた。……饂飩屋の門に博多節を弾いたのは、転進をやや縦に、三味線の手を緩めると、撥を逆手に、その柄で弾くようにして、仄のりと、薄赤い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「ご免なさいよ。」

頬被りの中の清しい目が、釜から吹出す湯気の裏へすっきりと、出たのを一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、腰掛けながら、うっかり聞惚れていた亭主で、紺の筒袖にめくら縞の前垂がけ、草色の股引で、尻からげの形、にょいと立って、

「出ないぜえ。」

は、ずるいな。……案ずるに我が家の門附を聞徳に、いざ、その段になった処で、件の（出ないぜ。）を極めてこまそ心積りを、唐突に頬被を突込まれて、大分狼狽えたものらしい。もっとも居合わした客はなかった。

門附は、澄まして、背後じめに戸を閉てながら、三味線を斜にずっと入って、

「あい、親方は出ずとも可いのさ。私の方で入るのだから。……ねえ、女房さん、そんなものじゃありませんかね。」

とちと笑声が交って聞えた。

女房は、これも現下の博多節に、うっかり気を取られて、釜前の湯気に朦として立っていた。……浅葱の襷、白い腕を、部厚な釜の

蓋にちょっと載せたが、丸髷をがっくりさした、色の白い、歯を染めた中年増。この途端に颯と瞼を赤うしたが、竈の前を横ッちょに、かたかたと下駄の音で、亭主の膝を斜交いに、帳場の銭箱へがっちりと手を入れる。

「ああ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

「串戯だ、強請んじゃありません。こっちが客だよ、客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六畳ばかりの市松畳、そこへ上れば坐れるのを、釜に近い、床几の上に、ト足を伸ばして、

「どうもね、寒くって堪らないから、一杯御馳走になろうと思って。ええ、親方、決してその御迷惑を掛けるもんじゃありません。」

で、優柔しく頬被りを取った顔を、と見ると迷惑どころかい、目鼻立ちのきりりとした、細面の、瞼に窶は見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八九の人品な兄哥である。

「へへへへ、いや、どうもな、」

と亭主は前へ出て、揉手をしながら、

「しかし、このお天気続きで、まず結構でござりやすよ。」と何もない、煤けた天井を仰ぎ仰ぎ、帳場の上の神棚へ目を外らす。

「お師匠さん、」

女房前垂をちょっと撫でて、

「お銚子でございますかい。」と莞爾する。

門附は手拭の上へ撥を置いて、腰へ三味線を小取廻し、内端に片膝を上げながら、床几の上に素足の胡坐。

ト裾を一つ掻込んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「ええ、もう飛切りのをおつけ申しますよ。」と女房は土間を横歩行き。左側の畳に据えた火鉢の中を、邪険に火箸で掻い掘って、赫と赤くなった処を、床几の門附へずいと寄せ、

「さあ、まあ、お当りなさりまし。」

「難有え、」

と鉄拐に褄へ引挟んで、ほうと呼吸を一つ長く吐いた。

「世の中にゃ、こんな炭火があると思うと、里心が付いてなお寒い。堪らねえ。女房さん、銚子をどうかね、ヤケという熱燗にしておくんなさい。ちっと飲んで、うんと酔おうという、卑劣な癖が付いてるんだ、お察しものですず、ええ、親方。」

「へへへ、お方、それ極熱じゃ。」

女房は染めた前歯を美しく、

「あいあい。」

四

「時に何かね、今此家の前を車が二台、旅の人を乗せて駈抜けたっけ、この町を、……」

と干した猪口で門を指して、

「二三町行った処で、左側の、屋根の大きそうな家へ着けたのが、蒼く月明りに見えたがね、……あすこは何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋でございまさ、なあ、」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。この土地じゃ、まああすこ一軒でござりますよ。古い家じゃが名代で。前には大きな女郎屋じゃったのが、旅籠

屋になったがな、部屋々々も昔風そのままな家じゃに、奥座敷の欄干の外が、海と一所の、大い揖斐の川口じゃ。白帆の船も通りますわ。鱚は刎ねる、鰡は飛ぶ。とんと類のない趣のある家じゃ。ところが、時々崖裏の石垣から、獺が這込んで、板廊下や厠に点いた燈を消して、悪戯をするげに言います。が、別に可恐い化方はしませぬで。こんな月の良い晩には、庭で鉢叩きをして見せる。……時雨れた夜さりは、天保銭一つ使賃で、豆腐を買いに行くと言う。それも旅の衆の愛嬌じゃ言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、この土地はまだ何も知りなさらんかい。」

「あい、昨夜初めてこっちへ流込んで来たばかりさ。一向方角も何も分らない。月夜も闇の烏さね。」

と俯向いて、一口。

「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣ったり！　ほっ、」

と言って、目を擦って面を背けた。

「利く、利く。……恐しい利く唐辛子だ。こう、親方の前だがね、ついこないだもこの手を食ったよ、料簡が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だろう。利くものか、と高を括って、お銭は要らない薬味なり、どしこと丼へぶちまけて、松坂で飛上った。……また遣ったさ、色気は無えね、涙と涎が一時だ。」と手の甲で引擦る。

女房が銚子のかわり目を、卜掌で燗を当った。

「お師匠さん、あんたは東の方ですなあ。」

「そうさ、生は東だが、身上は北山さね。」と言う時、徳利の底を振って、垂々と猪口へしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさろうと言うのかな。」

それだ、と門口で断らりょう、と亭主はその段含ませたそうな気の可い顔色。

「御串戯もんですぜ、泊りは木賃と極っていまさ。茣蓙と笠と草鞋が留守居。壁の破れた処から、鼠が首を長くして、私の帰るのを待っている。四五日はこの桑名へ御厄介になろうと思う。……上旅籠の湊屋で泊めてくれそうな御人品なら、御当家へ、一夜の御無心申したいね、どんなもんです、女房さん。」

「こんなでよくば、泊めますわ。」

と身軽に銚子を運んで寄る。と亭主驚いた眉を動かし、

「滅相な。」と帳場を背負って、立塞がる体に腰を掛けた。いや、この時まで、紺の鯉口に手首を縮めて、案山子のごとく立ったりける。

「ははは、お言葉には及びません、饂飩屋さんで泊めるものは、醤油の雨宿りか、鰹節の行者だろう。」

と呵々と一人で笑った。

「お師匠さん、一つお酌さしておくんなさいまし。」と女房は市松の畳の端から、薄く腰を掛込んで、土間を切って、差向いに銚子を取った。

「飛んでもない事、お忙しいに。」

「いえな、内じゃ芸妓屋さんへ出前ばかりが主ですから、ごらんの通りゆっくりじゃえな。ほんにお師匠さん佳いお声ですな。なあ、良人。」と、横顔で亭主を流眄。

「さよじゃ。」

とばかりで、煙草を、ぱっぱっ。

「なあ、今お聞かせやした、あの博多節を聞いたればな、……私や、

ほんに、身に染みて、ぶるぶると震えました。」

五

「そう讃められちゃお座が醒める、酔も醒めそうで遣瀬がない。たかが大道芸人さ。」

と兄哥は照れた風で腕組みした。

「私がお世辞を言うものですかな、真実ですえ。あの、その、なあ、悚然とするような、恍惚するような、緊めたような、投げたような、緩めたような、まあ、何んと言うて可かろうやら。海の中に柳があったら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいような、……何んとも言いようのない心持になったのですえ。」

と、脊筋を曲って、肩を入れる。

「お方、お方。」

と急込んで、訳もない事に不機嫌な御亭が呼ばわる。

「何じゃいし。」と振向くと、……亭主いつの間にか、神棚の下に、斜と構えて、帳面を引繰って、苦く睨み、

「升屋が懸はまだ寄越さんかい。」

と算盤を、ぱちりぱちり。

「今時どうしたえ、三十日でもありもせんに。……お師匠さん。」

「師匠じゃないわ、升屋が懸じゃい。」

「そないに急に気になるなら、良人、ちゃと行って取って来い。」

と下唇の刎調子。亭主ぎゃふんと参った体で、

「二進が一進、二進が一進、二一天作の五、五一三六七八九。」と、饅飩の帳の伸縮みは、加減だけで済むものを、醤油に水を割算段。

と釜の湯気の白けた処へ、星の凍てそうな按摩の笛。月天心の冬の町に、あたかもこれ凩を吹込む声す。

門附の兄哥は、ふと痩せた肩を抱いて、

「ああ、霜に響く。」……と言った声が、物語を読むように、朗に冴えて、且つ、鋭く聞えた。

「按摩が通る……女房さん、」

「ええ、笛を吹いてですな。」

「畜生、怪しからず身に染みる、堪らなく寒いものだ。」

と割膝に跪坐って、飲みさしの茶の冷えたのを、茶碗に傾け、ざぶりと土間へ、

「一ツこいつへ注いでおくんな、その方がお前さんも手数が要らない。」

「何んの、私はちっとも構うことないのですえ。」

「いや、御深切は難有いが、薬罐の底へ消炭で、湧くあとから醒める処へ、氷で咽喉を抉られそうな、あのピイピイを聞かされちゃ、身体にひびっ裂がはいりそうだ。……持って来な。」

と手を振るばかりに、一息にぐっと呷った。

「あれ、お見事。」

と目を※って、

「まあな、だけれどな、無理酒おしいなえ。沢山、あの、心配する方があるのですやろ。」

「お方、八百屋の勘定は。」

と亭主瞬きして頤を出す。女房は面白半分、見返りもしないで、

「取りに来たらお払いやすな。」

「ええ……と三百は三銭かい。」

で、算盤を空に弾く。

「女房さん。」

と呼んだ門附の声が沈んだ。

「何んです。」

「立続けにもう一つ。そして後を直ぐ、合点かね。」

「あい。合点でございますが、あんた、豪い大酒ですな。」

「せめて酒でも参らずば。」

と陽気な声を出しかけたが、つと仰向いて眦を上げた。

「あれ、また来たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞える。……ヤ、そんなにまだ夜は更けまいのに、屋根越の町一つ、こう……田圃の畔かとも思う処でも吹いていら。」

と身忙しそうに片膝立てて、当所なく※しながら、

「音は同じだが音が違う……女房さん、どれが、どんな顔の按摩だね。」

と聞く。……その時、白眼の座頭の首が、月に蒼ざめて覗きそうに、屋の棟を高く見た……目が鋭い。

「あれ、あんた、鹿の雌雄ではあるまいし、笛の音で按摩の容子は分りませぬもの。」

「まったくだ。」

と寂しく笑った、なみなみ注いだる茶碗の酒を、屹と見ながら、

「杯の月を酌もうよ、座頭殿。」と差俯いて独言した。……が博多節の文句か、知らず、陰々として物寂しい、表の障子も裏透くばかり、霜の月の影冴えて、辻に、町に、按摩の笛、そのあるものは波に響く。

六

「や、按摩どのか。何んだ、唐突に驚かせる。……要らんよ。要りませぬ。」

と弥次郎兵衛。湊屋の奥座敷、これが上段の間とも見える、次に六畳の附いた中古の十畳。障子の背後は直ぐに縁、欄干にずらりと硝子戸の外は、水煙渺として、曇らぬ空に雲かと見る、長洲の端に星一つ、水に近く晃らめいた、揖斐川の流れの裾は、潮を籠めた霧白く、月にも苫を伏せ、蓑を乾す、繋船の帆柱がすくすくと垣根に近い。そこに燭台を傍にして、火桶に手を懸け、怪訝な顔して、

「はて、お早いお着きお草臥れ様で、と茶を一ツ持って出て、年増の女中が、唯今引込んだばかりの処。これから膳にもしよう、酒にもしようと思うちょっとの隙間へ、のそりと出した、あの面はえ？……

この方、あの年増めを見送って、入交って来るは若いのか、と前髪の正面でも見ようと思えば、霜げた冬瓜に草鞋を打着けた、という異体な面を、襖の影から斜に出して、

（按摩でやす。）とまた、悪く抜衣紋で、胸を折って、横坐りに、蝋燭火へ紙火屋のかかった灯の向うへ、ぬいと半身で出た工合が、見越入道の御館へ、目見得の雪女郎を連れて出た、化の慶庵と言う体だ。

要らぬと言えば、黙然で、腰から前へ、板廊下の暗い方へ、スーと消えたり……怨敵、退散。」

と苦笑いして、……床の正面に火桶を抱えた、法然天窓の、連の、

その爺様を見遣って、

「捻平さん、お互に年は取りたくないてね。ちと三絃でも、とあるべき処を、お膳の前に按摩が出ますよ。……見くびったものではないか。」

「とかく、その年効いもなく、旅籠屋の式台口から、何んと、事も慇懃に出迎えた、家の隠居らしい切髪の婆様をじろりと見て、（ヤヤ、難有い、仏壇の中に美婦が見えるわ、簀の子の天井から落ち度い。）などと、膝栗毛の書抜きを遣らっしゃるで魔が魅すのじゃ、屋台は古いわ、造りも広大。」

と丸木の床柱を下から見上げた。

「千年の桑かの。川の底も料られぬ。燈も暗いわ、獺も出ようず。ちと懲りさっしゃるが可い。」

「さん候、これに懲りぬ事なし。」

と奥歯のあたりを膨らまして微笑みながら、両手を懐に、胸を拡く、襖の上なる額を読む。題して曰く、臨風榜可小楼。

「……とある、いかさまな。」

「床に活けたは、白の小菊じゃ、一束にして掴みざし、喝采。」と讃める。

「いや、翁寂びた事を言うわ。」

「それそれ、たったいま懲りると言うた口の下から、何んじゃ、それは。やあ、見やれ、其許の袖口から、茶色の手の、もそもそとした奴が、ぶらりと出たわ、揖斐川の獺の。」

「ほい、」

と視めて、

「南無三宝。」と慌しく引込める。

「何んじゃそれは。」

「ははははは、拙者うまれつき粗忽にいたして、よくものを落す処から、内の婆どのが計略で、手袋を、ソレ、ト左右糸で繋いだものさね。袖から胸へ潜らして、ずいと引張って両手へ嵌めるだ。何んと恐しかろう。捻平さん、かくまで身上を思うてくれる婆どのに対しても、無駄な祝儀は出せませんな。ああ、南無阿弥陀仏。」

「狸めが。」

と背を円くして横を向く。

「それ、年増が来る。秘すべし、秘すべし。」

で、手袋をたくし込む。

処へ女中が手を支いて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、やっと、今草鞋を解いたばかりだ。泊めてもらうから、支度はしません。」と真面目に言う。

色は浅黒いが容子の可い、その年増の女中が、これには妙な顔をして、

「へい、御飯は召あがりますか。」

「まず酒から飲みます。」

「あの、めしあがりますものは?」

「姉さん、ここは約束通り、焼蛤が名物だの。」

七

「そのな、焼蛤は、今も町はずれの葦簀張なんぞでいたします。やっぱり松毬で焼きませぬと美味うござりませんで、当家では蒸した

のを差上げます、味淋入れて味美う蒸します。」

「ははあ、栄螺の壺焼といった形、大道店で遣りますな。……松並木を向うに見て、松毬のちょろちょろ火、蛤の煙がこの月夜に立とうなら、とんと竜宮の田楽で、乙姫様が洒落に姉さんかぶりを遊ばそうという処、また一段の趣だろうが、わざとそれがために忍んでも出られまい。……当家の味淋蒸、それが好かろう。」

と小父者納得した顔して頷く。

「では、蛤でめしあがりますか。」

「何？」と、わざとらしく耳を出す。

「あのな、蛤であがりますか。」

「いや、箸で食いやしょう、ははは。」

と独で笑って、懐中から膝栗毛の五編を一冊、ポンと出して、

「難有い。」と額を叩く。

女中も思わず噴飯して、

「あれ、あなたは弥次郎兵衛様でございますな。」

「その通り。……この度の参宮には、都合あって五二館と云うのへ泊ったが、内宮様へ参る途中、古市の旅籠屋、藤屋の前を通った時は、前度いかい世話になった気で、薄暗いまで奥深いあの店頭に、真鍮の獅噛火鉢がぴかぴかとあるのを見て、略儀ながら、車の上から、帽子を脱いでお辞儀をして来た。が、町が狭いので、向う側の茶店の新姐に、この小冗を見せるのが辛かったよ。」

と燈に向けて、てらりと光らす。

「ほほ、ほほ。」

「あはは。」

で捻平も打笑うと、……この機会に誘われたか、——先刻二人が着いた頃には、三味線太鼓で、トトン、ジャカジャカじゃじゃじゃんと沸返るばかりだった——ちょうど八ツ橋形に歩行板が架って、土間を隔てた隣の座敷に、およそ十四五人の同勢で、女交りに騒いだのが、今しがた按摩が影を見せた時分から、大河の汐に引かれたらしく、ひとしきり人気勢が、遠くへ裾拡がりに茫と退いて、寂とした。ただだだっ広い中を、猿が鳴きながら走廻るように、キャキャとする雛妓の甲走った声が聞えて、重く、ずっしりと、覆かぶさる風に、何を話すともなく多人数の物音のしていたのが、この時、洞穴から風が抜けたように哄と動揺めく。

女中も笑い引きに、すっと立つ。

「いや、この方は陰々としている。」

「その方が無事で可いの。」

と捻平は火桶の上へ脊くぐまって、そこへ投出した膝栗毛を差覗き、

「しかし思いつきじゃ、私はどうもこの寝つきが悪いで、今夜は一つ枕許の行燈で読んでみましょう。」

「止しなさい、これを読むと胸が切って、なお目が冴えて寝られなくなります。」

「何を言わっしゃる、当事もない、膝栗毛を見て泣くものがあろうかい。私が事を言わっしゃる、其許がよっぽど捻平じゃ。」

と言う処へ、以前の年増に、小女がついて出て、膳と銚子を揃えて運んだ。

「蛤は直きに出来ます。」

「可、可。」

「何よりも酒の事。」

捻平も、猪口を急ぐ。

「さて汝にも一つ遣ろう。燗の可い処を一杯遣らっし。」と、弥次郎兵衛、酒飲みの癖で、ちとぶるぶるする手に一杯傾けた猪口を、膳の外へ、その膝栗毛の本の傍へ、畳の上にちゃんと置いて、

「姉さん、一つ酌いでやってくれ。」

と真顔で言う。

小女が、きょとんとした顔を見ると、捻平に追っかけの酌をしていた年増が見向いて、

「喜野、お酌ぎ……その旦那はな、弥次郎兵衛様じゃで、喜多八さんにお杯を上げなさるんや。」

と早や心得たものである。

八

小父者はなぜか調子を沈めて、

「ああ、よく言った。俺を弥次郎兵衛は難有い。居心は可、酒は可。これで喜多八さえ一所だったら、膝栗毛を正のもので、太平の民となる処を、さて、杯をさしたばかりで、こう酌いだ酒へ、蝋燭の灯のちらちらと映る処は、どうやら餓鬼に手向けたようだ。あのまた馬鹿野郎はどうしている――」と膝に手を支き、畳の杯を凝と見て、陰気な顔する。

捻平も、ふと、この時横を向いて腕組した。

「旦那、その喜多八さんを何んでお連れなさりませんね。」

と愛嬌造って女中は笑う。弥次郎寂しく打笑み、

「むむ、そりゃ何よ、その本の本文にある通り、伊勢の山田ではぐれた奴さ。いい年をして娑婆気な、酒も飲めば巫山戯もするが、世の中は道中同然。暖いにつけ、寒いにつけ、杖柱とも思う同伴の若いものに別れると、六十の迷児になって、もし、この辺に棚からぶら下がったような宿屋はござりませんかと、賑かな町の中を独りとぼとぼと尋ね飽倦んで、もう落胆しやした、と云ってな、どっかり知らぬ家の店頭へ腰を落込んで、一服無心をした処……あすこを読むと串戯ではない。……捻平さん、真からもって涙が出ます。」

と言う、瞼に映って、蝋燭の火がちらちらとする。

「姉や、心を切ったり。」

「はい。」

と女中が向うを向く時、捻平も目をしばたたいたが、

「ヤ、あの騒ぎわい。」

と鼻の下を長くして、土間越の隣室へ傾き、

「豪いぞ、金盥まで持ち出いたわ、人間は皆裾が天井へ宙乗りして、畳を皿小鉢が躍るそうな。おおおお、三味線太鼓が鎬を削って打合う様子じゃ。」

「もし、お騒がしゅうござりましょう、お気の毒でござります。ちょうど霜月でな、今年度の新兵さんが入営なさりますで、その送別会じゃ言うて、あっちこっち、皆、この景気でござります。でもな、お寝ります時分には時間になるで静まりましょう。どうぞ御辛抱なさいまして。」

「いやいや、それには及ばぬ、それには及ばぬ。」

と小父者、二人の女中の顔へ、等分に手を掉って、

「かえって賑かで大きに可い。悪く寂寞して、また唐突に按摩に出られては弱るからな。」

「へい、按摩がな。」と何か知らず、女中も読めぬ顔して聞返す。

捻平この話を、打消すように咳して、

「さ、一献参ろう。どうじゃ、こちらへも酌人をちと頼んで、……ええ、それ何んとか言うの。……桑名の殿様時雨でお茶漬……とか言う、土地の唄でも聞こうではないかの。陽気にな、かっと一つ。旅の恥は掻棄てじゃ。主はソレ叱言のような勧進帳でも遣らっしゃい。

染めようにも髯は無いで、私はこれ、手拭でも畳んで法然天窓へ載せようでの。」と捻平が坐りながら腰を伸して高く居直る。と弥次郎眼を※って、

「や、平家以来の謀叛、其許の発議は珍らしい、二方荒神鞍なしで、真中へ乗りやしょう。」

と夥しく景気を直して、

「姉え、何んでも構わん、四五人木遣で曳いて来い。」

と肩を張って大きに力む。

女中酌の手を差控えて、銚子を、膝に、と真直に立てながら、

「さあ、今あっちの座敷で、もう一人二人言うて、お掛けやしたが、喜野、芸妓さんはあったかな。」

小女が猪首で頷き、

「誰も居やはらぬ言うてでやんした。」

「かいな、旦那さん、お気の毒さまでござります。狭い土地に、数のない芸妓やによって、こうして会なんぞ立込みますと、目星い妓たちは、ちゃっとの間に皆出払います。そうか言うて、東京のお客様に、あんまりな人も見せられはしませずな、容色が好いとか、芸がたぎったとかいうのでござりませぬとなあ……」

「いや、こうなっては、宿賃を払わずに、こちとら夜遁をするまでも、三味線を聞かなきゃ納まらない。眇、いぐちでない以上は、古道具屋からでも呼んでくれ。」

「待ちなさりまし。おお、あの島屋の新妓さんならきっと居るやろ。聞いて見や。喜野、ソレお急ぎじゃ、廊下走って、電話へ掛れや。」

九

「持って来い、さあ、何んだ風車。」

急に勢の可い声を出した、饂飩屋に飲む博多節の兄哥は、霜の上の燗酒で、月あかりに直ぐ醒める、色の白いのもそのままであったが、二三杯、呷切の茶碗酒で、目の縁へ、颯と酔が出た。

「勝手にピイピイ吹いておれ、でんでん太鼓に笙の笛、こっちあ小児だ、なあ、阿嬶。……いや、女房さん、それにしても何かね、御当処は、この桑名と云う所は、按摩の多い所かね。」と笛の音に瞳がちらつく。

「あんたもな、按摩の目は蠣や云います。名物は蛤じゃもの、別に何も、多い訳はないけれど、ここは新地なり、旅籠屋のある町やに因って、つい、あの衆が、あちこちから稼ぎに来るわな。」

「そうだ、成程新地だった。」となぜか一人で納得して、気の抜けたような片手を支く。

「お師匠さん、あんた、これからその音声を芸妓屋の門で聞かしてお見やす。ほんに、人死が出来ようも知れぬぜな。」と襟の処で、塗盆をくるりと廻す。

「飛んだ合せかがみだね、人死が出来て堪るものか。第一、芸妓屋

の前へは、うっかり立てねえ。」

「なぜえ。」

「悪くすると敵に出会す。」と投首する。

「あれ、芸が身を助けると言う、……お師匠さん、あんた、芸妓ゆえの、お身の上かえ。……ほんにな、仇だすな。」

「違った！　芸者の方で、私が敵さ。」

「あれ、のけのけと、あんな憎いこと言いなさんす。」と言う処へ、月は片明りの向う側。狭い町の、ものの気勢にも暗い軒下を、からころ、からころ、駒下駄の音が、土間に浸込むように響いて来る。……と直ぐその足許を潜るように、按摩の笛が寂しく聞える。

門附は屹と見た。

「噂をすれば、芸妓はんが通りまっせ。あんた、見たいなら障子を開けやす……そのかわり、敵打たりょうと思うてな。」

「ああ、いつでも打たれてやら。ちょッ、可厭に煩く笛を吹くない。」

かたりと門の戸を外から開ける。

「ええ、吃驚すら。」

「今晩は、――饂飩六ツ急いでな。」と草履穿きの半纏着、背中へ白く月を浴びて、赤い鼻をぬいと出す。

「へい。」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒に突立ち、

「お方、そりゃ早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい跫音やな、どこの？」と聞く。

「こないだ山田の新町から住替えた、こんの島家の新妓じゃ。」と言いながら、鼻赤の若い衆は、覗いた顔を外に曲げる。

と門附は、背後の壁へ胸を反らして、ちょっと伸上るようにして、戸に立つ男の肩越しに、皎とした月の廓の、細い通を見透かした。

駒下駄はちと音低く、まだ、からころと響いたのである。

「沢山出なさるかな。」

「まあ、こんの饂飩のようには行かぬで。」

「その気で、すぐに届けますえ。」

「はい頼んます。」と、男は返る。

亭主帳場から背後向きに、日和下駄を探って下り、がたりびしりと手当り強く、そこへ広蓋を出掛ける。ははあ、夫婦二人のこの店、気の毒千万、御亭が出前持を兼ねると見えたり。

「裏表とも気を注けるじゃ、可いか、可いか。ちょっと道寄りをして来るで、可いか、お方。」

とそこいらじろじろと睨廻して、新地の月に提灯入らず、片手懐にしたなりで、亭主が出前、ヤケにがっと戸を開けた。後を閉めないで、ひょこひょこ出て行く。

釜の湯気が颯と分れて、門附の頬に影がさした。

女房横合から来て、

「いつまで、うっかり見送ってじゃ、そんなに敵が打たれたいの。」

「女房さん、桑名じゃあ……芸者の箱屋は按摩かい。」と悚気としたように肩を細く、この時やっと居直って、女房を見た、色が悪い。

十

「そうさ、いかに伊勢の浜荻だって、按摩の箱屋というのはなかろう。私もなかろうと思うが、今向う側を何んとか屋の新妓とか云う

のが、からんころんと通るのを、何心なく見送ると、あの、一軒おき二軒おきの、軒行燈では浅葱になり、月影では青くなって、薄い紫の座敷着で、褄を蹴出さず、ひっそりと、白い襟を俯向いて、足の運びも進まないように何んとなく悄れて行く。……その後から、鼠色の影法師。女の影なら月に地を這う筈だに、寒い道陸神が、のそのそと四五尺離れた処を、ずっと前方まで附添ったんだ。腰附、肩附、歩行く振、捏っちて附着けたような不恰好な天窓の工合、どう見ても按摩だね、盲人らしい、めんない千鳥よ。……私あ何んだ、だから、按摩が箱屋をすると云っちゃ可笑い、盲目になった箱屋かも知れないぜ。」

「どんな風の、どれな。」

と門へ出そうにする。

「いや、もう見えない。呼ばれた家へ入ったらしい。二人とも、ずっと前方で居なくなった。そうか。ああ、盲目の箱屋は居ねえのか。アまた殖えたぜ……影がさす、笛の音に影がさす、按摩の笛が降るようだ。この寒い月に積ったら、桑名の町は針の山になるだろう、堪らねえ。」

とぐいと呷って、

「ええ、ヤケに飲め、一杯どうだ、女房さん附合いねえ。御亭主は留守だが、明放しよ、……構うものか。それ向う三軒の屋根越に、雪坊主のような山の影が覗いてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「来た、来た、来た、来やあがった、来やあがった、按摩々々、按摩。」

と呼吸も吐かず、続けざまに急込んだ、自分の声に、町の中に、ぬい、と立って、杖を脚許へ斜交いに突張りながら、目を白く仰向いて、月に小鼻を照らされた流しの按摩が、呼ばれたものと心得て、そのまま凍附くように立留まったのも、門附はよく分らぬ状で、

「影か、影か、阿嬶、ほんとの按摩か、影法師か。」

と激しく聞く。

「ほんとなら、どうおしる。貴下、そんなに按摩さんが恋しいかな。」

「恋しいよ！　ああ、」

と呼吸を吐いて、見直して、眉を顰めながら、声高に笑った。

「ははははは、按摩にこがれてこの体さ。おお、按摩さん、按摩さん、さあ入ってくんねえ。」

門附は、撥を除けて、床几を叩いて、

「一つ頼もう。女房さん、済まないがちょいと借りるぜ。」

「この畳へ来て横におなりな。按摩さん、お客だす、あとを閉めておくんなさい。」

「へい。」

コトコトと杖の音。

「ええ……とんと早や、影法師も同然なもので。」と掠れ声を白く出して、黒いけんちゅう羊羹色の被布を着た、燈の影は、赤くその皺の中へさし込んだが、日和下駄から消えても失せず、片手を泳ぎ、片手で酒の香を嗅分けるように入った。

「聞えたか。」

とこの門附は、権のあるものいいで、五六本銚子の並んだ、膳をまた傍へずらす。

「へへへ」とちょっと鼻をすすって、ふん、とけなりそうに香を嗅

ぐ。

「待ちこがれたもんだから、戸外を犬が走っても、按摩さんに見えたのさ。こう、悪く言うんじゃないぜ……そこへぬっくりと顕れたろう、酔っている、幻かと思った。」

「ほんに待兼ねていなさったえ。あの、笛の音ばかり気にしなさるので、私もどうやら解めなんだが、やっと分ったわな、何んともお待遠でござんしたの。」

「これは、おかみさま、御繁昌。」

「お客はお一人じゃ、ゆっくり療治してあげておくれ。それなりにお寝ったら、お泊め申そう。」

と言う。

按摩どの、けろりとして、

「ええ、その気で、念入りに一ツ、掴りましょうで。」と我が手を握って、拉ぐように、ぐいと揉んだ。

「へい、旦那。」

「旦那じゃねえ。ものもらいだ。」とまた呻る。

女房が竊と睨んで、

「滅相な、あの、言いなさる。」

十一

「いや、横になるどころじゃない、沢山だ、ここで沢山だよ。……第一背中へ掴まられて、一呼吸でも応えられるかどうだか、実はそれさえ覚束ない。悪くすると、そのまま目を眩して打倒れようも知れんのさ。体よく按摩さんに掴み殺されるといった形だ。」

と真顔で言う。

「飛んだ事をおっしゃりませ、田舎でも、これでも、長年年期を入れました杉山流のものでござります。鳩尾に鍼をお打たせになりましても、決して間違いのあるようなものではござりませぬ。」と呆れたように、按摩の剥く目は蒼かりけり。

「うまい、まずいを言うのじゃない。いつの幾日にも何時にも、洒落にもな、生れてからまだ一度も按摩さんの味を知らないんだよ。」

「まあ、あんなにあんた、こがれなさった癖に。」

「そりゃ、張って張って仕様がないから、目にちらつくほど待ったがね、いざ……となると初産です、灸の皮切も同じ事さ。どうにも勝手が分らない。痛いんだか、痒いんだか、風説に因ると擽ったいとね。多分私も擽ったかろうと思う。……ところがあいにく、母親が操正しく、これでも密夫の児じゃないそうで、その擽ったがりようこの上なし。……あれ、あんなあの、握飯を拵えるような手附をされる、とその手で揉まれるかと思ったばかりで、もう堪らなく擽ったい。どうも、ああ、こりゃ不可え。」

と脇腹へ両肱を、しっかりついて、掻竦むように脊筋を捻る。

「ははははは、これはどうも。」と按摩は手持不沙汰な風。

女房更めて顔を覗いて、

「何んと、まあ、可愛らしい。」

「同じ事を、可哀想だ、と言ってくんねえ。……そうかと言って、こう張っちゃ、身も皮も石になって固りそうな、背が詰って胸は裂ける……揉んでもらわなくては遣切れない。遣れ、構わない。」

と激しい声して、片膝を屹と立て、

「殺す気で蒐れ。こっちは覚悟だ、さあ。ときに女房さん、袖摺り

合うのも他生の縁ッさ。旅空掛けてこうしたお世話を受けるのも前の世の何かだろう、何んだか、おなごりが惜いんです。掴殺されりゃそれきりだ、も一つ憚りだがついでおくれ、別れの杯になろうも知れん。」

と雫を切って、ついと出すと、他愛なさもあんまりな、目の色の変りよう、眦も屹となったれば、女房は気を打たれ、黙然でただ目を※る。

「さあ按摩さん。」

「ええ、」

「女房さん酌いどくれよ！」

「はあ、」と酌をする手がちと震えた。

この茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛けたのと一緒であった。

がたがたと身震いしたが、面は幸に紅潮して、

「ああ、腸へ沁透る！」

「何かその、何事か存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。」と、これもおどつく。

「まず、」

と突張った手をぐたりと緩めて、

「生命に別条は無さそうだ、しかし、しかし応える。」

とがっくり俯向いたのが、ふらふらした。

「月は寒し、炎のようなその指が、火水となって骨に響く。胸は冷い、耳は熱い。肉は燃える、血は冷える。あっ、」と言って、両手を落した。

吃驚して按摩が手を引く、その嘴や鮹に似たり。

兄哥は、しっかり起直って、

「いや、手をやすめず遣ってくれ、あわれと思って静に……よしんば徐と揉まれた処で、私は五体が砕ける思いだ。

その思いをするのが可厭さに、いろいろに悩んだんだが、避ければ摺着く、過ぎれば引張る、逃げれば追う。形が無ければ声がする……ピイピイ笛は攻太鼓だ。こうひしひしと寄着かれちゃ、弱いものには我慢が出来ない。淵に臨んで、崖の上に瞰下ろして踏留まる胆玉のないものは、いっその思い、真逆に飛込みます。破れかぶれよ、按摩さん、従兄弟再従兄弟か、伯父甥か、親類なら、さあ、敵を取れ。私はね、……お仲間の按摩を一人殺しているんだ。」

十二

「今からちょうど三年前。……その年は、この月から一月後の師走の末に、名古屋へ用があって来た。ついでと言っては悪いけれど、稼の繰廻しがどうにか附いて、参宮が出来るというのも、お伊勢様の思召、冥加のほど難有い。ゆっくり古市に逗留して、それこそついでに、……浅熊山の雲も見よう、鼓ヶ嶽の調も聞こう。二見じや初日を拝んで、堺橋から、池の浦、沖の島で空が別れる、上郡から志摩へ入って、日和山を見物する。……海が凪いだら船を出して、伊良子ヶ崎の海鼠で飲もう、何でも五日六日は逗留というつもりで。……山田では尾上町の藤屋へ泊った。驚くべからず——まさかその時は私だって、浴衣に袷じゃ居やしない。

着換えに紋付の一枚も持った、縞で襲衣の若旦那さ。……ま、こう、雲助が傾城買の昔を語る……負惜みを言うのじゃないよ。何も

自分の働きでそうした訳じゃないのだから。――聞きねえ、親なり、叔父なり、師匠なり、恩人なりという、……私が稼業じゃ江戸で一番、日本中の家元の大黒柱と云う、少兀の苦い面した阿父がある。

いや、その顔色に似合わない、気さくに巫山戯た江戸児でね。行年その時六十歳を、三つと刻んだはおかしいが、数え年のサバを算んで、私が代理に宿帳をつける時は、天地人とか何んとか言って、禅の問答をするように、指を三本、ひょいと出してギロリと睨む……五十七歳とかけと云うのさ。可いかね、その気だもの……旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、阿父さんが大の禁句さ。……与一兵衛じゃあるめえし、汝、定九郎のように呼ぶなえ、と唇を捻曲げて、叔父さんとも言わせねえ、兄さんと呼べ、との御意だね。

この叔父さんのお供だろう。道中の面白さ。酒はよし、景色はよし、日和は続く。どこへ行っても女はふらない。師走の山路に、嫁菜が盛りで、しかも大輪が咲いていた。

とこの桑名、四日市、亀山と、伊勢路へ掛った汽車の中から、おなじ切符のたれかれが――その催について名古屋へ行った、私たちの、まあ……興行か……その興行の風説をする。嘘にもどうやら、私の評判も可さそうな。叔父はもとより。……何事も言うには及ばん。――私が口で饒舌っては、流儀の恥になろうから、まあ、何某と言ったばかりで、世間は承知すると思って、聞きねえ。

ところがね、その私たちの事を言うついでに、この伊勢へ入ってから、きっと一所に出る、人の名がある。可いかい、山田の古市に惣市と云う按摩鍼だ。」

門附はその名を言う時、うっとりと瞳を据えた。背を抱くように背後に立った按摩にも、床几に近く裾を投げて、向うに腰を掛けた女房にも、目もくれず、凝と天井を仰ぎながら、胸前にかかる湯気を忘れたように手で捌いて、

「按摩だ、がその按摩が、旧はさる大名に仕えた士族の果で、聞きねえ。私等が流儀と、同じその道の芸の上手。江戸の宗家も、本山も、当国古市において、一人で兼ねたり、という勢で、自ら宗山と名告る天狗。高慢も高慢だが、また出来る事も出来る。……東京の本場から、誰も来て怯かされた。某も参って拉がれた。あれで一眼でも有ろうなら、三重県に居る代物ではない。今度名古屋へ来た連中もそうじゃ、贋物ではなかろうから、何も宗山に稽古をしてもらえとは言わぬけれど、鰻の他に、鯛がある、味を知って帰れば可いに。――と才発けた商人風のと、でっぷりした金の入歯の、土地の物持とも思われる奴の話したのが、風説の中でも耳に付いた。

叔父はこくこく坐睡をしていたっけ。私あ若気だ、襟巻で顔を隠して、睨むように二人を見たのよ、ね。

宿の藤屋へ着いてからも、わざと、叔父を一人で湯へ遣り……女中にもちょっと聞く。……挨拶に出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云う、これこれした芸人が居るか、と聞くと、誰の返事も同じ事。思ったよりは高名で、現に、この頃も藤屋に泊った、何某侯の御隠居の御召に因って、上下で座敷を勤た時、（さてもな、鼓ヶ嶽が近いせいか、これほどの松風は、東京でも聞けぬ、）と御賞美。（的等にも聞かせたい。）と宗山が言われます、とちょろりと饒舌った。私が夥間を――（的等。）と言う。

的等の一人、かく言う私だ……」

「なお聞けば、古市のはずれに、その惣市、小料理屋の店をして、妾の三人もある、大した勢だ、と言うだろう。――何を！……按摩の分際で、宗家の、宗の字、この道の、本山が凄じい。

こう、按摩さん、舞台の差は堪忍してくんな。」

と、竊と痛そうに胸を圧えた。

「後で、よく気がつけば、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、ほんとの猪はないとて威張る。……な、宮重大根が日本一なら、蕪の千枚漬も皇国無双で、早く言えば、この桑名の、焼蛤も三都無類さ。その気で居れば可いものを、二十四の前厄なり、若気の一図に苛々して、第一その宗山が気に入らない。（的等。）もぐっと癪に障れば、妾三人で赫とした。

維新以来の世がわりに、……一時私等の稼業がすたれて、夥間が食うに困ったと思え。弓矢取っては一万石、大名株の芸人が、イヤ楊枝を削る、かるめら焼を露店で売る。……蕎麦屋の出前持になるのもあり、現在私がその小父者などは、田舎の役場に小使いをして、濁り酒のかすに酔って、田圃の畝に寝たもんです。……

その妹だね、可いかい、私の阿母が、振袖の年頃を、困る処へ附込んで、小金を溜めた按摩めが、ちとばかりの貸を枷に、妾にしよう、と追い廻わす。――危く駒下駄を踏返して、駕籠でなくっちゃ見なかった隅田川へ落ちようとしたっさ。――その話にでも嫌いな按摩が。

ええ。

待て、見えない両眼で、汝が身の程を明く見るよう、療治を一つしてくりょう。

で、翌日は謹んで、参拝した。

その尊さに、その晩ばかりはちっとの酒で宵寝をした、叔父の夜具の裾を叩いて、枕許へ水を置き、

（女中、そこいらへ見物に、）

と言った心は、穴を圧えて、宗山を退治る料簡。

と出た、風が荒い。荒いがこの風、五十鈴川で劃られて、宇治橋の向うまでは吹くまいが、相の山の長坂を下から哄と吹上げる……これが悪く生温くって、灯の前じゃ砂が黄色い。月は雲の底に淀りしている。神路山の樹は蒼くても、二見の波は白かろう。酷い勢、ぱっと吹くので、たじたじとなる。帽子が飛ぶから、そのまま、藤屋が店へ投返した……と脊筋へ孕んで、坊さんが忍ぶように羽織の袖が飜々する。着換えるのも面倒で、昼間のなりで、神詣での紋付さ。――袖畳みに懐中へ捻込んで、何の洒落にか、手拭で頬被りをしたもんです。

門附になる前兆さ、状を見やがれ。」と片手を袖へ、二の腕深く突込んだ。片手で狙うように茶碗を圧えて、

「ね、古市へ行くと、まだ宵だのに寂然している。……軒が、がたぴしと鳴って、軒行燈がばッばッ揺れる。三味線の音もしたけれど、吹さらわれて大屋根へ猫の姿でけし飛ぶようさ。何の事はない、今夜のこの寂しい新地へ、風を持って来て、打着けたと思えば可い。

一軒、地のちと窪んだ処に、溝板から直ぐに竹の欄干になって、毛氈の端は刎上り、畳に赤い島が出来て、洋燈は油煙に燻ったが、真白に塗った姉さんが一人居る、空気銃、吹矢の店へ、ひょろりとして引掛ったね。

取着きに、肱を支いて、怪しく正面に眼の光る、悟った顔の達磨

様と、女の顔とを、七分三分に狙いながら、

（この辺に宗山ッて按摩は居るかい。）とここで実は様子を聞く気さ。押懸けて行こうたってちっとも勝手が知れないから。

（先生様かね、いらっしゃります。）と何と、（的等。）の一人に、先生を、しかも、様づけに呼ぶだろう。

（実は、その人の何を、一つ、聞きたくって来たんだが、誰が行っても頼まれてくれるだろうか。）と尋ねると、大熨斗を書いた幕の影から、色の蒼い、鬢の乱れた、痩せた中年増が顔を出して、（知己のない、旅の方にはどうか知らぬ、お望なら、内から案内して上げましょうか。）と言う。

茶代を奮発んで、頼むと言った。

（案内して上げなはれ、可い旦那や、気を付けて、）と目配をする、……と雑作はない、その塗ったのが、いきなり、欄干を跨いで出る奴さ。」

十四

「両袖で口を塞いで、風の中を俯向いて行く。……その女の案内で、つい向う路地を入ると、どこも吹附けるから、戸を鎖したが、怪しげな行燈の煽って見える、ごたごたした両側の長屋の中に、溝板の広い、格子戸造りで、この一軒だけ二階屋。

軒に、御手軽御料理としたのが、宗山先生の住居だった。

（お客様。）と云う女の送りで、ずッと入る。直ぐそこの長火鉢を取巻いて、三人ばかり、変な女が、立膝やら、横坐りやら、猫板に頬杖やら、料理の方は隙らしい。……上框の正面が、取着きの狭い階子段です。

（座敷は二階かい、）と突然頬被を取って上ろうとすると、風立つので燈を置かない。真暗だからちょっと待って、と色めいてざわつき出す。とその拍子に風のなぐれで、奴等の上の釣洋燈がぱっと消えた。

そこへ、中仕切の障子が、次の室の燈にほのめいて、二枚見えた。真中へ、ぱっと映ったのが、大坊主の額の出た、唇の大い影法師。む、宗山め、居るな、と思うと、憎い事には……影法師の、その背中に掴まって、坊主を揉んでるのが華奢らしい島田髷で、この影は、濃く映った。

火燧々々、と女どもが云う内に、

（えへん）と咳を太くして、大な手で、灰吹を持上げたのが見えて、離れて煙管が映る。――もう一倍、その時図体が拡がったのは、袖を開いたらしい。此奴、寝ん寝子の広袖を着ている。

やっと台洋燈を点けて、

（お待遠でした、さあ、）

って二階へ。吹矢の店から送って来た女はと、中段からちょっと見ると、両膝をずしりと、そこに居た奴の背後へ火鉢を離れて、俯向いて坐った。

（あの娘で可いのかな、他にもござりますよって。）

と六畳の表座敷で低声で言うんだ。――ははあ、商売も大略分った、と思うと、其奴が

（お誂は。）

と大な声。

（あっさりしたものでちょっと一口。そこで……）

実は……御主人の按摩さんの、咽喉が一つ聞きたいのだ、と話した。

（咽喉？）……と其奴がね、異に蔑んだ笑い方をしたものです。

（先生様の……でござりますか、早速そう申しましょう。）

で、地獄の手曳め、急に衣紋繕いをして下りる。しばらくして上って来た年紀の少い十六七が、……こりゃどうした、よく言う口だが芥溜に水仙です、鶴です。帯も襟も唐縮緬じゃあるが、もみじのように美しい。結綿のふっくりしたのに、浅葱鹿の子の絞高な手柄を掛けた。やあ、三人あると云う、妾の一人か。おおん神の、お膝許で沙汰の限りな！　宗山坊主の背中を揉んでた島田髷の影らしい。惜しや、五十鈴川の星と澄んだその目許も、鯰の鰭で濁ろう、と可哀に思う。この娘が紫の袱紗に載せて、薄茶を持って来たんです。

いや、御本山の御見識、その咽喉を聞きに来たとなると……客にまず袴を穿かせる仕向をするな、真剣勝負面白い。で、こっちも勢、懐中から羽織を出して着直したんだね。

やがて、また持出した、杯というのが、朱塗に二見ヶ浦を金蒔絵した、杯台に構えたのは凄かろう。

（まず一ツ上って、こっちへ。）

と按摩の方から、この杯の指図をする。その工合が、謹んで聞け、といった、頗る権高なものさ。どかりとそこへ構え込んだ。その容子が膝も腹もずんぐりして、胴中ほど咽喉が太い。耳の傍から眉間へ掛けて、小蛇のように筋が畝くる。眉が薄く、鼻がひしゃげて、ソレその唇の厚い事、おまけに頬骨がギシと出て、歯を噛むとガチガチと鳴りそう。左の一眼べとりと盲い、右が白眼で、ぐるりと飜った、しかも一面、念入の黒痣瘡だ。

が、争われないのは、不具者の相格、肩つきばかりは、みじめらしくしょんぼりして、猪の熊入道もがっくり投首の抜衣紋で居たんだよ。」

十五

「いえな、何も私が意地悪を言うわけではないえ。」

と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして――傍に柔かな髪の房りした島田の鬢を重そうに差俯向く……襟足白く冷たそうに、水紅色の羽二重の、無地の長襦袢の肩が辷って、寒げに脊筋の抜けるまで、嫺やかに、打悄れた、残んの嫁菜花の薄紫、浅葱のように目に淡い、藤色縮緬の二枚着で、姿の寂しい、二十ばかりの若い芸者を流眄に掛けつつ、

「このお座敷は貰うて上げるから、なあ和女、もうちゃっと内へお去にや。……島家の、あの三重さんやな、和女、お三重さん、お帰り！」

と屹と言う。

「お前さんがおいでやで、ようお客さんの御機嫌を取ってくれるであろうと、小女ばかり附けておいて、私が勝手へ立違うている中や、……勿体ない、お客たちの、お年寄なが気に入らぬか、近頃山田から来た言うて、こちの私の許を見くびったか、酌をせい、と仰有っても、浮々とした顔はせず……三味線聞こうとおっしゃれば、鼻の頭で笑うたげな。傍に居た喜野が見かねて、私の袖を引きに来た。

先刻から、ああ、こうと、口の酸くなるまで、機嫌を取るようにして、私が和女の調子を取って、よしこの一つ上方唄でも、どうぞ

三味線の音をさしておくれ。お客様がお寂しげな、座敷が浮かぬ、お見やんせ、蝋燭の灯も白けると、頼むようにして聞かいても、知らぬ、知らぬ、と言通す。三味線は和女、禁物か。下手や言うて、知らぬ云うて、曲なりにもお座つき一つ弾けぬ芸妓がどこにある。

よう、思うてもお見。平の座敷か、そでないか。貴客がたのお人柄を見りゃ分るに、何で和女、勤める気や。私が済まぬ。さ、お立ち。ええ、私が箱を下げてやるから。」

と優しいのがツンと立って、襖際に横にした三味線を邪険に取って、衝と縦様に引立てる。

「ああれ。」

はっと裳を摺らして、取縋るように、女中の膝を竊と抱き、袖を引き、三味線を引留めた。お三重の姿は崩るるごとく、芍薬の花の散るに似て、

「堪忍して下さいまし、堪忍して、堪忍して、」と、呼吸の切れる声が湿んで、

「お客様にも、このお内へも、な、何で私が失礼しましょう。ほんとに、あの、ほんとに三味線は出来ませんもの、姉さん、」

と言が途絶えた。……

「今しがたも、な、他家のお座敷、隅の方に坐っていました。不断ではない、兵隊さんの送別会、大陽気に騒ぐのに、芸のないものは置かん、衣服を脱いで踊るんなら可、可厭なら下げると……私一人帰されて、主人の家へ戻りますと、直ぐに酷いめに逢いました、え。

三味線も弾けず、踊りも出来ぬ、座敷で衣物が脱げないなら、内で脱げ、引剥ぐと、な、帯も何も取られた上、台所で突伏せられて、引窓をわざと開けた、寒いお月様のさす影で、恥かしいなあ、柄杓で水を立続けて乳へも胸へもかけられましたの。

こちらから、あの、お座敷を掛けて下さいますと、どうでしょう、炬燵で温めた襦袢を着せて、東京のお客じゃそうなと、な、取って置きの着物を出して、よう勤めて帰れや言うて、御主人が手で、駒下駄まで出すんです。

勤めるたって、どうしましょう……踊は立って歩行くことも出来ませんし、三味線は、それが姉さん、手を当てれば誰にだって、音のせぬ事はないけれど、弾いて聞かせとおっしゃるもの、どうして私唄えます。……

不具でもないに情ない。調子が自分で出来ません。何をどうして、お座敷へ置いて頂けようと思いますと、気が怯けて気が怯けて、口も満足利けませんから、何が気に入らないで、失礼な顔をすると、お思い遊ばすのも無理はない、なあ。……

このお家へは、お台所で、洗い物のお手伝をいたします。姉さん、え、姉さん。」

と袖を擦って、一生懸命、うるんだ目許を見得もなく、仰向けになって女中の顔。……色が見る見る柔いで、突いて立った三味線の棹も撓みそうになった、と見ると、二人の客へ、向直った、ふっくりとある綾の帯の結目で、なおその女中の袂を圧えて。……

十六

お三重は、そして、更めて二箇の老人に手を支いた。

「芸者でお呼び遊ばした、と思いますと……お役に立たず、極りが悪うございまして、お銚子を持ちますにも手が震えてなりません。

下婢をお傍へお置き遊ばしたとお思いなさいまして、お休みになりますまでお使いなすって下さいまし。お背中を敲きましょう、な、どうぞな、お肩を揉まして下さいまし。それなら一生懸命にきっと精を出します。」

と惜気もなく、前髪を畳につくまで平伏した。三指づきの折かがみが、こんな中でも、打上る。

本を開いて、道中の絵をじろじろと黙って見ていた捻平が、重くるしい口を開けて、

「子孫末代よい意見じゃ、旅で芸者を呼ぶなぞは、のう、お互に以後謹もう……」と火箸に手を置く。

所在なさそうに半眼で、正面に臨風榜可小楼を仰ぎながら、程を忘れた巻莨、この時、口許へ火を吸って、慌てて灰へ抛って、弥次郎兵衛は一つ咽せた。

「ええ、いや、女中、……追って祝儀はする。ここでと思うが、その娘が気が詰ろうから、どこか小座敷へ休まして皆で饂飩でも食べてくれ。私が驕る。で、何か面白い話をして遊ばして、やがて可い時分に帰すが可い。」と冷くなった猪口を取って、寂しそうに衝と飲んだ。

女中は、これよりさき、支いて突立ったその三味線を、次の室の暗い方へ密と押遣って、がっくりと筋が萎えた風に、折重なるまで摺寄りながら、黙然りで、燈の影に水のごとく打揺ぐ、お三重の背中を擦っていた。

「島屋の亭が、そんな酷い事をしおるかえ。可いわ、内の御隠居にそう言うて、沙汰をして上げよう。心安う思うておいで、ほんにまあ、よう和女、顔へ疵もつけんの。」

と、かよわい腕を撫下ろす。

「ああ、それも売物じゃいうだけの斟酌に違いないな。……お客様に礼言いや。さ、そして、何かを話しがてら、御隠居の炬燵へおいで。切下髪に頭巾被って、ちょうどな、羊羹切って、茶を食べてや。

けども、」

とお三重の、その清らかな襟許から、優しい鬢毛を差覗くように、右瞻左瞻て、

「和女、因果やな、ほんとに、三味線は弾けぬかい。ペンともシャンとも。」

で、わざと慰めるように吻々と笑った。

人の情に溶けたと見える……氷る涙の玉を散らして、はっと泣いた声の下で、

「はい、願掛けをしましても、塩断ちまでしましたけれど、どうしても分りません、調子が一つ出来ません。性来でございしょう。」

師走の闇夜に白梅の、面を蝋に照らされる。

「踊もかい。」

「は……い、」

「泣くな、弱虫、さあ一つ飲まんか！　元気をつけて。向後どこへか呼ばれた時は、怯えるなよ。気の持ちようでどうにもなる。ジャカジャカと引鳴らせ、糸瓜の皮で掻廻すだ。琴も胡弓も用はない。銅鑼鐃※を叩けさ。簫の笛をピイと遣れ、上手下手は誰にも分らぬ。それなら芸なしとは言われまい。踊が出来ずば体操だ。一、」

と左右へ、羽織の紐の断れるばかり大手を拡げ、寛濶な胸を反らすと、

「二よ。」と、庄屋殿が鉄砲二つ、ぬいと前へ突出いて、励ますごとく呵々と弥次郎兵衛、

「これ、その位な事は出来よう。いや、それも度胸だな。見た処、そのように気が弱くては、いかな事も遣つけられまい、可哀相に。」と声が掠れる。

「あの……私が、自分から、言います事は出来ません、お恥しいのでございますが、舞の真似が少しばかり立てますの、それもただ一ツだけ。」

と云う顔を俯向いて、恥かしそうにまた手を支く。

「舞えるかえ、舞えるのかえ。」

と女中は嬉しそうな声をして、

「おお、踊や言うで明かんのじゃ。舞えるのなら立っておくれ。このお座敷、遠慮は入らん。待ちなはれ、地が要ろう。これ喜野、あすこの広間へ行ってな、内の千がそう言うたて、誰でも弾けるのを借りて来やよ。」

とぽんとしていた小女の喜野が立とうとする、と、名告ったお千が、打傾いて、優しく口許をちょいと曲げて傾いて、

「待って、待って、」

十七

「いつもと違う。……一度軍隊へ行きなさると、日曜でのうては出られぬ、……お国のためやで、馴れぬ苦労もしなさんす。新兵さんの送別会や。女衆が大勢居ても、一人抜けてもお座敷が寂しくなるもの。

可いわ、旅の恥は掻棄てを反対ながが、一泊りのお客さんの前、私が三味線を掻廻そう。お三重さん、立つのは何？　有るものか、無いものか言うも行過ぎた……有るものとて無いけれど、どうにか間に合わせたいものではある。」

「あら、姉さん。」

と、三味線取りに立とうとした、お千の膝を、袖で圧えて、ちとはなじろんだ、お三重の愛嬌。

「糸に合うなら踊ります。あのな、私のはな、お能の舞の真似なんです。」と、言いも果てず、お千の膝に顔を隠して、小父者と捻平に背向になった初々しさ。包ましやかな姿ながら、身を揉む姿の着崩れして、袖を離れて畳に長い、襦袢の袖は媚かしい。

「何、その舞を舞うのかい。」と弥次郎兵衛は一言云う。

捻平膝の本をぱったり伏せて、

「さて、飲もう。手酌でよし。ここで舞なぞは願い下げじゃ。せめてお題目の太鼓にさっしゃい。ふあははは、」となぜか皺枯れた高笑い、この時ばかり天井に哄と響いた。

「捻平さん、捻さん。」

「おお。」

と不性げにやっと応える。

「何も道中の話の種じゃ、ちょっと見物をしようと思うね。」

「まず、ご免じゃ。」

「さらば、其許は目を瞑るだ。」

「ええ、縁起の悪い事を言わさる。……明日にも江戸へ帰って、可愛い孫娘の顔を見るまでは、死んでもなかなか目は瞑らぬ。」

「さてさて捻るわ、ソレそこが捻平さね。勝手になされ。さあ、あ

の娘立ったり、この爺様に遠慮は入らぬぞ。それ、何にも芸がないと云うて肩腰をさすろうと卑下をする。どんな真似でも一つ遣れば、立派な芸者の面目が立つ。祝儀取るにも心持が可かろうから、是非見たい。が、しかし心のままにしなよ、決して勤を強いるじゃないぞ。」

「あんなに仰有って下さるもの。さあ、どんな事するのや知らんが、まずうても大事ない、大事ない、それ、支度は入らぬかい。」

「あい、」

とわずかに身を起すと、紫の襟を噛むように——ふっくりしたのが、あわれに窶れた——頤深く、恥かしそうに、内懐を覗いたが、膚身に着けたと思わるる、……胸やや白き衣紋を透かして、濃い紫の細い包、袱紗の縮緬が飜然と飜ると、燭台に照って、颯と輝く、銀の地の、ああ、白魚の指に重そうな、一本の舞扇。

晃然とあるのを押頂くよう、前髪を掛けて、扇をその、玉簪のごとく額に当てたを、そのまま折目高にきりきりと、月の出汐の波の影、静に照々と開くとともに、顔を隠して、反らした指のみ、両方親骨にちらりと白い。

また川口の汐加減、隣の広間の人動揺めきが颯と退く。

と見れば皎然たる銀の地に、黄金の雲を散らして、紺青の月、ただ一輪を描いたる、扇の影に声澄みて、

「——その時あま人申様、もしこのたまを取得たらば、この御子を世継の御位になしたまえと申しかば、子細あらじと領承したもう、さて我子ゆえに捨ん命、露ほども惜からじと、千尋のなわを腰につけ、もしこの玉をとり得たらば、このなわを動かすべし、その時人々ちからをそえ——」

と調子が緊って、

「……ひきあげたまえと約束し、一の剣を抜持って、」

と扇をきりりと袖を直す、と手練ぞ見ゆる、自から、衣紋の位に年長けて、瞳を定めたその顔。硝子戸越に月さして、霜の川浪照添う俤。膝立据えた畳にも、燭台の花颯と流るる。

「ああ、待てい。」

と捻平、力の籠った声を掛けた。

十八

で、火鉢をずっと傍へ引いて、

「女中、もちっとこれへ火をおくれ。いや、立つに及ばん。その、鉄瓶をはずせば可し。」と捻平がいいつける。

この場合なり、何となく、お千も起居に身体が緊った。

静に炭火を移させながら、捻平は膝をずらすと、革鞄などは次の室へ……それだけ床の間に差置いた……車の上でも頸に掛けた風呂敷包を、重いもののように両手で柔かに取って、膝の上へ据えながら、お千の顔を除けて、火鉢の上へ片手を裏表かざしつつ、

「ああ、これ、お三重さんとか言うの、そのお娘、手を上げられい。さ、手を上げて、」

と言う。……お三重は利剣で立とうとしたのを、慌しく捻平に留められたので、この時まで、差開いたその舞扇が、唇の花に霞むまで、俯向いた顔をひたと額につけて、片手を畳に支していた。こう捻平に声懸けられて、わずかに顔を振上げながら、きりきりと一まず閉じると、その扇を畳むに連れて、今まで、濶と瞳を張って見据

えていた眼を、次第に塞いだ弥次郎兵衛は、ものも言わず、火鉢のふちに、ぶるぶると震う指を、と支えた態の、巻莨から、音もしないで、ほろほろと灰がこぼれる。

捻平座蒲団を一膝出て、

「いや、更めて、熟と、見せてもらおうじゃが、まずこっちへ寄らしゃれ。ええ、今の謡の、気組みと、その形。教えも教えた、さて、習いも習うたの。

こうまでこれを教うるものは、四国の果にも他にはあるまい。あらかた人は分ったが、それとなく音信も聞きたい。の、其許も黙って聞かっしゃい。」

と弥次が方に、捻平目遣いを一つして、

「まず、どうして、誰から、御身は習うたの。」

「はい、」

と弱々と返事した。お三重はもう、他愛なく娘になって、ほろりとして、

「あの、前刻も申しましたように、不器用も通越した、調子はずれ、その上覚えが悪うござんして、長唄の宵や待ちの三味線のテンもツンも分りません。この間まで居りました、山田の新町の姉さんが、朝と昼と、手隙な時は晩方も、日に三度ずつも、あの噛んで含めて、胸を割って刻込むように教えて下すったんでございますけれど、自分でも悲しい。……暁の、とだけ十日かかって、やっと真似だけ弾けますと、夢になってもう手が違い、心では思いながら、三の手が一へ滑って、とぼけたような音がします。

撥で咽喉を引裂かれ、煙管で胸を打たれたのも、糸を切った数より多い。

それも何も、邪険でするのではないのです。……私が、な、まだその前に、鳥羽の廓に居ました時、……」

「ああ、お前さんは、鳥羽のものかい、志摩だな。」

と弥次郎兵衛がフト聞入れた。

「いえ、私はな、やっぱりお伊勢なんですけれど、父さんが死くなりましてから、継母に売られて行きましたの。はじめに聞いた奉公とは嘘のように違います。――お客の言うことを聞かぬ言うて、陸で悪くば海で稼げって、崖の下の船着から、夜になると、男衆に捉えられて、小船に積まれて海へ出て、月があっても、島の蔭の暗い処を、危いなあ、ひやひやする、木の葉のように浮いて歩行いて、寂とした海の上で……悲しい唄を唄います。そしてお客の取れぬ時は、船頭衆の胸に響いて、女が恋しゅうなる禁厭じゃ、お茶挽いた罰、と云って、船から海へ、びしゃびしゃと追下ろして、汐の干た巌へ上げて、巌の裂目へ俯向けに口をつけさして、（こいし、こいし。）と呼ばせます。若い衆は舳に待ってて、声が切れると、栄螺の殻をぴしぴしと打着けますの。汐風が濡れて吹く、夏の夜でも寒いもの。……私のそれは、師走から、寒の中で、八百八島あると言う、どの島も皆白い。霜風が凍りついた、巌の角は針のような、あの、その上で、（こいし、こいし。）って、唇の、しびれるばかり泣いている。咽喉は裂け、舌は凍って、潮を浴びた裙から冷え通って、正体がなくなる処を、貝殻で引掻かれて、やっと船で正気が付くのは、灯もない、何の船やら、あの、まあ、鬼の支いた棒見るような帆柱の下から、皮の硬い大な手が出て、引掴んで抱込みます。

空には蒼い星ばかり、海の水は皆黒い。暗の夜の血の池に落ちたようで、ああ、生きているか……千鳥も鳴く、私も泣く。……お恥

かしゅうござんす。」

と翳す扇の利剣に添えて、水のような袖をあて、顔を隠したその風情。人は声なくして、ただ、ちりちりと、蝋燭の涙白く散る。

この物語を聞く人々、いかに日和山の頂より、志摩の島々、海の凪、霞の池に鶴の舞う、あの、麗朗なる景色を見たるか。

十九

「泣いてばかりいますから、気の荒いお船頭が、こんな泣虫を買うほどなら、伊良子崎の海鼠を蒲団で、弥島の烏賊を遊ぶって、どの船からも投出される。

また、あの巌に追上げられて、霜風の間々に、（こいし、こいし。）と泣くのでござんす。

手足は凍って貝になっても、（こいし）と泣くのが本望な。巌の裂目を沖へ通って、海の果まで響いて欲しい。もう船も去ね、潮も来い。……そのままで石になってしまいたいと思うほど、お客様、私は、あの、」

と乱れた襦袢の袖を銜えた、水紅色映る瞼のあたり、ほんのりと薄くして、

「心でばかり長い事、思っております人があって。……芸も容色もないものが、生意気を云うようですが、……たとい殺されても、死んでもと、心願掛けておりました。

ある晩も、やっぱり蒼い灯の船に買われて、その船頭衆の言う事を肯かなかったので、こっちの船へ突返されると、艫の処に行火を跨いで、どぶろくを飲んでいた、私を送りの若い衆がな、玉代だけ損をしやはれ、此方衆の見る前で、この女を、海士にして慰もうと、月の良い晩でした。

胴の間で着物を脱がして、膚の紐へなわを付けて、倒に海の深みへ沈めます。ずんずんずんと沈んでな、もう奈落かと思う時、釣瓶のようにきりきりと、身体を車に引上げて、髪の雫も切らせずに、また海へ突込みました。

この時な、その繋り船に、長崎辺の伯父が一人乗込んでいると云うて、お小遣の無心に来て、泊込んでおりました、二見から鳥羽がよいの馬車に、駅者をします、寒中、襯衣一枚に袴服を穿いた若い人が、私のそんなにされるのが、あんまり可哀相な、とそう云うて、伊勢へ帰って、その話をしましたので、今、あの申しました。……この間までおりました、古市の新地の姉さんが、随分なお金子を出して、私を連れ出してくれましたの。

それでな、鳥羽の鬼へも面当に、芸をよく覚えて、立派な芸子になれやッて、姉さんが、そうやって、目に涙を一杯ためて、ぴしぴし撥で打ちながら、三味線を教えてくれるんですが、どうした因果か、ちっとも覚えられません。

人さしと、中指と、ちょっとの間を、一日に三度ずつ、一週間も鳴らしますから、近所隣も迷惑して、御飯もまずいと言うのですえ。

また月の良い晩でした。ああ、今の御主人が、親切なだけなお辛い。……何の、身体の切ない、苦しいだけは、生命が絶えればそれで済む。いっそまた鳥羽へ行って、あの巌に掴まって、（こいし、こいし、）と泣こうか知らぬ、膚の紐になわつけて、海へ入れられるが気安いような、と島も海も目に見えて、ふらふらと月の中を、千鳥が、冥土の使いに来て、連れて行かれそうに思いました。……

格子前へ流しが来ました。

新町の月影に、露の垂りそうな、あの、ちらちら光る撥音で、

……博多帯しめ、筑前絞り――

と、何とも言えぬ好い声で。

（へい、不調法、お喧しゅう、）って、そのまま行きそうにしたのです。

（ああ、身震がするほど上手い、あやかるように拝んで来な、それ、お賽銭をあげる気で。）

と滝縞お召の半纏着て、灰に袖のつくほどに、しんみり聞いてやった姉さんが、長火鉢の抽斗からお宝を出して、キイと、あの繻子が鳴る、帯へ挿んだ懐紙に捻って、私に持たせなすったのを、盆に乗せて、戸を開けると、もう一二間行きなさいます。二人の間にある月をな、影で繋いで、ちゃっと行って、

（是喃。）と呼んで、出した盆を、振向いてお取りでした。私や、思わずその手に縋って、涙がひとりでに出ましたえ。男で居ながら、こんなにも上手な方があるものを、切めてその指一本でも、私の身体についたらばと、つい、おろおろと泣いたのです。

頬被をしていなすった。あのその、私の手を取ったまま――黙って、少し脇の方へ退いた処で、（何を泣く、）って優しい声で、その門附が聞いてくれます。もう恥も何も忘れてな、その、あの、どうしても三味線の覚えられぬ事を話しました。」

二十

「よく聞いて、しばらく熟と顔を見ていなさいました。

（芸事の出来るように、神へ願懸をすると云って、夜の明けぬ内、外へ出ろ。鼓ヶ嶽の裾にある、雑樹林の中へ来い。三日とも思うけれど、主人には、七日と頼んで。すぐ、今夜の明方から。……分ったか。若い女の途中が危い、この入口まで来て待ってやる、化されると思うな、夢ではない。……）

とお言いのなり、三味線を胸に附着けて、フイと暗がりへ附着いて、黒塀を去きなさいます。……

その事は言わぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで垢離取って、願懸けすると頼んだら、姉さんは、喜んで、承知してくれました。

殺されたら死ぬ気でな、――大恩のある御主人の、この格子戸も見納めか、と思うようで、軒下へ出て振返って、門を視めて、立っているとな。

（おいで、）

と云って、突然、背後から手を取りなすった、門附のそのお方。

私はな、よう覚悟はしていたが、天狗様に攫われるかと思いましたえ。

あとは夢やら現やら。明方内へ帰ってからも、その後は二日も三日もただ茫としておりましたの。……鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流の音と聞えます、雑木の森の暗い中で、その方に教わりました。……舞も、あの、さす手も、ひく手も、ただ背後から背中を抱いて下さいますと、私の身体が、舞いました。それだけより存じません。

もっとも、私が、あの、鳥羽の海へ投入れられた、その身の上も話しました。その方は不思議な事で、私とは敵のような中だ事も、いろいろ入組んではおりますけれど、鼓ヶ嶽の裾の話は、誰にも言

うな、と口留めをされました。何んにも話がなりません。

五日目に、もう可いから、これを舞って座敷をせい。芸なし、とは言うまい、ッて、お記念なり、しるしなりに、この舞扇を下さいました。」

と袖で胸へしっかと抱いて、ぶるぶると肩を震わした、後毛がはらりとなる。

捻平溜息をして頷き、

「いや、よく分った。教え方も、習い方も、話されずとよく分った。時に、山田に居て、どうじゃな、その舞だけでは勤まらなんだか。」

「はい、はじめて謡いました時は、皆が、わっと笑うやら、中には恐い怖いと云う人もござんす。なぜ言うと、五日ばかり、あの私がな、天狗様に誘い出された、と風説したのでござんすから。」

「は、いかにも師匠が魔でなくては、その立方は習われぬわ。むむ、で、何かの、伊勢にも謡うたうものの、五人七人はあろうと思うが、その連中には見せなんだか。」

「ええ、物好に試すって、呼んだ方もありましたが、地をお謡いなさる方が、何じゃやら、ちっとも、ものにならぬと言って、すぐにお留めなさいましたの。」

「ははあ、いや、その足拍子を入れられては、やわな謡は断れて飛ぶじゃよ。ははははは、唸る連中粉灰じゃて。かたがたこの桑名へ、住替えとやらしたのかの。」

「狐狸や、いや、あの、吠えて飛ぶ処は、梟の憑物がしよった、と皆気違にしなさいます。姉さんも、手放すのは可哀相や言って下さいましたけれど、……周囲の人が承知しませず、……この桑名の島屋とは、行かいはせぬ遠い中でも、姉さんの縁続きでござんすから、預けるつもりで寄越されましたの。」

「おお、そこで、また辛い思をさせられるか。まずまず、それは後でゆっくり聞こう。……そのお娘、私も同一じゃ。天魔でなくて、若い女が、術をするわと、仰天したので、手を留めて済まなんだ。さあ、立直して舞うて下さい。大儀じゃろうが一さし頼む。私も久ぶりで可懐しい、御身の姿で、若師匠の御意を得よう。」

と言の中に、膝で解く、その風呂敷の中を見よ。土佐の名手が画いたような、紅い調は立田川、月の裏皮、表皮。玉の砧を、打つや、うつつに、天人も聞けかしとて、雲井、と銘ある秘蔵の塗胴。老の手捌き美しく、錦に梭を、投ぐるよう、さらさらと緒を緊めて、火鉢の火に高く翳す、と……呼吸をのんで驚いたように見ていたお千は、思わず、はっと両手を支いた。

芸の威厳は争われず、この捻平を誰とかする、七十八歳の翁、辺見秀之進。近頃孫に代を譲って、雪叟とて隠居した、小鼓取って、本朝無双の名人である。

いざや、小父者は能役者、当流第一の老手、恩地源三郎、すなわちこれ。

この二人は、侯爵津の守が、参宮の、仮の館に催された、一調の番組を勤め済まして、あとを膝栗毛で帰る途中であった。

二十一

さて、饂飩屋では門附の兄哥が語り次ぐ。

「いや、それから、いろいろ勿体つける所作があって、やがて大坊主が謡出した。

聞くと、どうして、思ったより出来ている、按摩鍼の芸ではない。……戸外をどッどと吹く風の中へ、この声を打撒けたら、あのピイピイ笛ぐらいに纏まろうというもんです。成程、随分夥間には、此奴に（的等。）扱いにされようというのが少くない。

が、私に取っちゃ小敵だった。けれども芸は大事です、侮るまい、と気を緊めて、そこで、膝を。」

と坐直ると、肩の按摩が上へ浮いて、門附の衣紋が緊る。

「……この膝を丁と叩いて、黙って二ツ三ツ拍子を取ると、この拍子が尋常んじゃない。……親なり師匠の叔父きの膝に、小児の時から、抱かれて習った相伝だ。対手の節の隙間を切って、伸縮みを緊めつ、緩めつ、声の重味を刎上げて、咽喉の呼吸を突崩す。寸法を知らず、間拍子の分らない、まんざらの素人は、盲目聾で気にはしないが、ちと商売人の端くれで、いささか心得のある対手だと、トンと一つ打たれただけで、もう声が引掛って、節が不状に蹴躓く。三味線の間も同一だ。どうです、意気なお方に釣合わぬ……ン、と一ツ刎ねないと、野暮な矢の字が、とうふにかすがい、糠に釘でぐしゃりとならあね。

さすがに心得のある奴だけ、商売人にぴたりと一ツ、拍子で声を押伏せられると、張った調子が直ぐにたるんだ。思えば余計な若気の過失、こっちは畜生の浅猿しさだが、対手は素人の悲しさだ。

あわれや宗山。見る内に、額にたらたらと衝と汗を流し、死声を振絞ると、頤から胸へ膏を絞った……あのその大きな唇が海鼠を干したように乾いて来て、舌が硬って呼吸が発奮む。わなわなと震える手で、畳を掴むように、うたいながら猪口を拾おうとする処、ものの本をまだ一枚とうたわぬ前、ピシリとそこへ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、ドン底から節が抜けたものらしい。

はっと火のような呼吸を吐く、トタンに真俯向けに突伏す時、長々と舌を吐いて、犬のように畳を嘗めた。

（先生、御病気か。）

って私あ莞爾したんだ。

（是非聞きたい、平にどうか。宗山、この上に聾になっても、貴下のを一番、聞かずには死なれぬ。）

と拳を握って、せいせい言ってる。

（按摩さん。）

と私は呼んで、

（尾上町の藤屋まで、どのくらい離れている。）

（何んで、）

と聞く。

（間によっては声が響く。内証で来たんだ。……藤屋には私の声が聞かしたくない、叔父が一人寝てござるんだ。勇士は霜の気勢を知るとさ——ただささえ目敏い老人が、この風だから寝苦しがって、フト起きてでもいるとならない、祝儀は置いた。帰るぜ。）

ト宗山が、凝と塞いだ目を、ぐるぐると動かして、

（暫く、今の拍子を打ちなされ……古市から尾上町まで声が聞えようか、と言いなされる、御大言、年のお少さ。まだ一度も声は聞かず、顔はもとより見た事もなけれども……当流の大師匠、恩地源三郎どの養子と聞く……同じ喜多八氏の外にはあるまい。さようでござろう、恩地、）

と私の名をちゃんと言う。

ああ、酔った、」

と杯をばたりと落した。

「饒舌って悪い私の名じゃない。叔父に済まない。二人とも、誰にも言うな。……」

と鷹揚で、按摩と女房に目をあしらい。

「私は羽織の裾を払って、

（違ったような、当ったようだ、が、何しろ、東京の的等の一人だ。宗家の宗、本山の山、宗山か。若布の附焼でも土産に持って、東海道を這い上れ。恩地の台所から音信れたら、叔父には内証で、居候の腕白が、独楽を廻す片手間に、この浦船でも教えてやろう。）

とずっと立つ。

二十二

「痘瘡の中に白眼を剥いて、よたよたと立上って、憤った声ながら、

（可懐いわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。触らせて下され、つかまらせて下され、一撫で、撫でさせて下され。）

と言う。

いや、撫られて堪りますか。

摺抜けようとするんだがね、六畳の狭い座敷、盲目でも自分の家だ。

素早く、階子段の降口を塞いで、むずと、大手を拡げたろう。……影が天井へ懸って、充満の黒坊主が、汗膏を流して撫じようとする。

いや、その嫉妬執着の、険な不思議の形相が、今もって忘れられない。

（可厭だ、可厭だ、可厭だ。）と、こっちは夢中に出ようとする、よける、留める、行違うで、やわな、かぐら堂の二階中みしみしと鳴る。風は轟々と当る。ただ黒雲に捲かれたようで、可恐しくなった、凄さは凄し。

衝と、引潜って、ドンと飛び摺りに、どどどと駈け下りると、ね。

（袖や、止めません。）

と宗山が二階で喚いた。皺枯声が、風でぱっと耳に当ると、三四人立騒ぐ女の中から、すっと美しく姿を抜いて、格子を開けた門口で、しっかり掴まる。吹きつけて揉む風で、颯と紅い褄が搦むように、私に縋ったのが、結綿の、その娘です。

背中を揉んでた、薄茶を出した、あの影法師の妾だろう。

ものを言う清い、張のある目を上から見込んで、構うものか、行きがけだ。

（可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の玩弄物にされるな。）

と言捨てに突放す。

（あれ。）と云う声がうしろへ、ぱっと吹飛ばされる風に向って、砂塵の中へ、や、躍込むようにして一散に駈けて返った。

後に知った、が、妾じゃない。お袖と云うその可愛いのは、宗山の娘だったね。それを娘と知っていたら、いや、その時だって気が付いたら、按摩が親の仇敵でも、私あ退治るんじゃなかったんだ。」

と不意にがツくりと胸を折って俯向くと、按摩の手が、肩を辷って、ぬいと越す。……その袖の陰で、取るともなく、落した杯を探りながら、

「もしか、按摩が尋ねて来たら、堅く居らん、と言え、と宿のものへ吩附けた。叔父のすやすやは、上首尾で、並べて取った床の中へ、すっぽり入って、引被って、可心持に寝たんだが。

ああ、寝心の好い思いをしたのは、その晩きりさ。

なぜッて、宗山がその夜の中に、私に辱められたのを口惜しがって、傲慢な奴だけに、ぴしりと、もろい折方、憤死してしまったんだ。七代まで流儀に祟る、と手探りでにじり書した遺書を残してな。死んだのは鼓ヶ嶽の裾だった。あの広場の雑樹へ下って、夜が明けて、やッと小止になった風に、ふらふらとまだ動いていたとさ。

こっちは何にも知らなかろう、風は凪ぐ、天気は可。叔父は一段の上機嫌。……古市を立って二見へ行った。朝の中、朝日館と云うのへ入って、いずれ泊る、……先へ鳥羽へ行って、ゆっくりしようと、直ぐに車で、上の山から、日の出の下、二見の浦の上を通って、日和山を桟敷に、山の上に、海を青畳にして二人で半日。やがて朝日館へ帰る、……とどうだ。

旅籠の表は黒山の人だかりで、内の廊下もごった返す。大袈裟な事を言うんじゃない。伊勢から私たちに逢いに来たのだ。按摩の変事と遺書とで、その日の内に国中へ知れ渡った。別にその事について文句は申さぬ。芸事で宗山の留を刺したほどの豪い方々、是非に一日、山田で謡が聞かして欲しい、と羽織袴、フロックで押寄せたろう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不所存もの、恩地源三郎が申渡す、向後一切、謡を口にすること罷成らん。立処に勘当だ。さて宗山とか云う盲人、己が不束なを知って屈死した心、かくのごときは芸の上の鬼神なれば、自分は、葬式の送迎、墓に謡を手向きよう、と人々と約束して、私はその場から追出された。

あとの事は何も知らず、その時から、津々浦々をさすらい歩行く、門附の果敢い身の上。」

二十三

「名古屋の大須の観音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあったを工面したのがはじまりで、一銭二銭、三銭じゃ木賃で泊めぬ夜も多し、日数をつもると野宿も半分、京大阪と経めぐって、西は博多まで行ったっけ。

何んだか伊勢が気になって、妙に急いで、逆戻りにまた来た。……

私が言ったただ一言、（人のおもちゃになるな。）と言ったを、生命がけで守っている。……可愛い娘に逢ったのが一生の思出だ。どうなるものでもないんだから、早く影をくらましたが、四日市で煩って、女房さん。」

と呼びかけた。

「お前さんじゃないけれど、深切な人があった。やっと足腰が立ったと思いねえ。上方筋は何でもない、間違って謡を聞いても、お百姓が、（風呂が沸いた）で竹法螺吹くも同然だが、東へ上って、箱根の山のどてっぱらへ手が掛ると、もう、な、江戸の鼓が響くから、どう我慢がなるものか！　うっかり謡をうたいそうで危くってならないからね、今切は越せません。これから大泉原、員弁、阿下岐をかけて、大垣街道。岐阜へ出たら飛騨越で、北国筋へも廻ろうかしら、と富田近所を三日稼いで、桑名へ来たのが昨日だった。

その今夜はどうだ。不思議な人を二人見て、遣切れなくなってこの家へ飛込んだ。が、流の笛が身体に刺る。いつもよりはなお激しい。そこへまた影を見た。美しい影も見れば、可恐しい影も見た。ここで按摩が殺す気だろう。構うもんか、勝手にしろ、似たものを引つけて、とそう覚悟して按摩さん、背中へ掴ってもらったんだ。

が、筋を抜かれる、身を※られる、私が五体は裂けるようだ。」

とまた差俯向く肩を越して、按摩の手が、それも物に震えながら、はたはたと戦きながら、背中に獅噛んだ面の附着く……門附の袷の襖せた色は、膚薄な胸を透かして、動悸が筋に映るよう、あわれ、博多の柳の姿に、土蜘蛛一つ搦みついたように凄く見える。

「誰や！」

と、不意に吃驚したような女房の声、うしろ見られる神棚の灯も暗くなる端に、べろべろと紙が濡れて、門の腰障子に穴があいた。それを見咎めて一つ喚く、とがたがたと、跫音高く、駈け退いたのは御亭どの。

いや、困った親仁が、一人でない、薪雑棒、棒千切れで、二人ばかり、若いものを連れていた。

「御老体、」

雪叟が小鼓を緊めたのを見て……こう言って、恩地源三郎が儼然として顧みて、

「破格のお附合い、恐多いな。」

と膝に扇を取って会釈をする。

「相変らず未熟でござる。」

と雪叟が礼を返して、そのまま座を下へおりんとした。

「平に、それは。」

「いや、蒲団の上では、お流儀に失礼じゃ。」

「は、その娘の舞が、甥の奴の俤ゆえに、遠慮した、では私も、」

と言った時、左右へ、敷物を斉しく刎ねた。

「嫁女、嫁女、」

と源三郎、二声呼んで、

「お三重さんか、私は嫁と思うぞ。喜多八の叔父源三郎じゃ、更めて一さし舞え。」

二人の名家が屹と居直る。

瞳の動かぬ気高い顔して、恍惚と見詰めながら、よろよろと引退る、と黒髪うつる藤紫、肩も腕も嬌娜ながら、袖に構えた扇の利剣、霜夜に声も凜々と、

「……引上げたまえと約束し、一つの利剣を抜持って……」

肩に綾なす鼓の手影、雲井の胴に光さし、艶が添って、名誉が籠めた心の花に、調の緒の色、颯と燃え、ヤオ、と一つ声が懸る。

「あっ、」

とばかり、屹と見据えた——能楽界の鶴なりしを、雲隠れつ、と惜まれた——恩地喜多八、饂飩屋の床几から、衝と片足を土間に落して、

「雪叟が鼓を打つ！　鼓を打つ！」と身を揉んだ、胸を切めて、慌しく取って蔽うた、手拭に、かっと血を吐いたが、かなぐり棄てると、右手を掴んで、按摩の手をしっかと取った。

「祟らば、祟れ、さあ、按摩。湊屋の門まで来い。もう一度、若旦那が聞かしてやろう。」

と、引立てて、ずいと出た。

「（源三郎）……かくて竜宮に至りて宮中を見れば、その高さ三十丈の玉塔に、かの玉をこめ置、香花を備え、守護神は八竜並居たり、その外悪魚鰐の口、遁れがたしや我命、さすが恩愛の故郷のかたぞ恋しき、あの浪のあなたにぞ……」

その時、漲る心の張に、島田の元結ふっつと切れ、肩に崩るる緑の黒髪。水に乱れて、灯に揺めき、畳の海は裳に澄んで、塵も留めぬ舞振かな。

「（源三郎）……我子は有らん、父大臣もおわすらむ……」

と声が幽んで、源三郎の地謡う節が、フト途絶えようとした時であった。

この湊屋の門口で、爽に調子を合わした。……その声、白き虹のごとく、衝と来て、お三重の姿に射した。

「（喜多八）……さるにてもこのままに別れ果なんかなしさよと、涙ぐみて立ちしが……」

「やあ、大事な処、倒れるな。」

と源三郎すっと座を立ち、よろめく三重の背を支えた、老の腕に女浪の袖、この後見の大磐石に、みるの緑の黒髪かけて、颯と翳すや舞扇は、銀地に、その、雲も恋人の影も立添う、光を放って、灯を白めて舞うのである。

舞いも舞うた、謡いも謡う。はた雪叟が自得の秘曲に、桑名の海も、トトと大鼓の拍子を添え、川浪近くタタと鳴って、太鼓の響に汀を打てば、多度山の霜の頂、月の御在所ヶ嶽の影、鎌ヶ嶽、冠ヶ嶽も冠着て、客座に並ぶ気勢あり。

小夜更けぬ。町凍てぬ。どことしもなく虚空に笛の聞えた時、恩地喜多八はただ一人、湊屋の軒の蔭に、姿蒼く、影を濃く立って謡うと、月が棟高く廂を照らして、渠の面に、扇のような光を投げた。舞の扇と、うら表に、そこでぴたりと合うのである。

「（喜多八）……また思切って手を合せ、南無や志渡寺の観音薩※の力をあわせてたびたまえとて、大悲の利剣を額にあて、竜宮に飛び入れば、左右へはっとぞ退いたりける、」

と謡い澄ましつつ、

「背を貸せ、宗山。」と言うとともに、恩地喜多八は疲れた状して、先刻からその裾に、大きく何やら蹲まった、形のない、ものの影を、腰掛くるよう、取って引敷くがごとくにした。

路一筋白くして、掛行燈の更けたかなたこなた、杖を支いた按摩も交って、ちらちらと人立ちする。

明治四十三（一九一〇）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房
　　1996（平成8）年3月21日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集」岩波書店
　　1942（昭和17）年7月刊行開始
※底本で句点が抜けている箇所は親本を参照して補いました。
※誤植を疑った箇所はちくま日本文学全集を参照しました。
入力：門田裕志
校正：砂場清隆
2002年1月9日公開
2005年9月25日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

歌行燈

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/